

Special Interview

ハリー杉山

タレント

留学は自分に向けての
素晴らしい投資だと思います



イギリンド人のお父様、日本人のお母様の間に生まれ、イギリスと日本を結び付ける話題はもちろん、さまざまな情報を発信しているハリー・杉山さん。11歳のときに旅立ったイギリス留学、そして大学時代に中国に留学した経験がなければ、今のご活躍はないと言い切れます。グローバリズムが進むこの時代に「伝える人」として生きていきたいと語るハリーさんが、どのようにしてここまでキャリアを積み上げてきたのかをお聞きしました。

PROFILE ハリー杉山（はりーすぎやま）

1985年1月20日生まれ。東京都出身。イギリンド人ジャーナリストの父の影響を強く受けて育つ。母は日本人。11歳で渡英し、13歳のときに英国最古のパブリックスクール、ウィンチester・カレッジに入学。ロンドン大学進学前からモデルの仕事を始め、現在はタレント、MC、ラジオDJ、執筆活動など多岐に渡って活躍中。

明確なビジョンを もって臨む イギリスの大学受験

—— ハリーさんは、11歳でロンドンのプレップスクール(全寮制私立学校に入るための準備をする学校)に編入、13歳から伝統校のウィンチェスター・カレッジで青春時代を過ごし、卒業後はロンドン大学の東洋アフリカ研究院(School of Oriental and African Studies／以下SOAS)に入学されました。イギリスの大学入試はどのような感じですか。

まず学校の成績で書類審査があつてインタビュー(面接)に呼ばれたり、いろんな条件で“オファー”をいただくんです。オファーというのは、「うちの学校にきてもらいたいですよ、この条件でどうですか?」という、大学からの提示ですね。僕がSOASから受けたオファーは直接も免除でしたが、残念ながら希望する大学からオファーを受けられないこともあります。

僕がSOASに行ったのは、ジャーナリストの父から「いずれ中国がアジアを、そして世界を引っ張っていくような国になる」と常々聞かされていたので、中国語を勉強したかったからです。将来的に役立つことを勉強しようと考えました。その頃、2008年の北京オリンピック開催も決まっていたし、自然な流れだったと思います。

みんな、「この学校でこれを学びたい」という明確なビジョンを持って進路を決めていましたね。なんとなく大学を決める人は僕の周りではいませんでした。もしきんとしたモチベーションがなければ、入学してもすぐに脱落してしまうと思います。僕の大学の同級生にも、1学期でドロップアウトしてしまった人もいました。



ウィンチェスター・カレッジ

ウィンチェスター・カレッジ時代の仲間と20代に再会



—— 20歳で大学に入学されていますが、入試はいつ受けたのですか?

最終学年の2学期くらいでオファーをいただいて、卒業前に進路は決定していましたが、卒業後に「ギャップイヤー」を取りました。ギャップイヤーというのはイギリスの教育システムで今もあると思うんですが、大学に入る前に、本当の世界は何か、自分の目で見てきなさいという制度です。社員として仕事をする人やバイトをする人もいれば、ケニアやサハラ砂漠でボランティアをする人、南の島でのんびり過ごす人などもいました。強制ではないので、すぐに大学に入る人もいます。

僕はダブルギャップイヤー(2年間)を取りました。失いかけて日本語を取り戻したかったこともあり、日本に帰国して外資系のM&Aを専門とするコンサルタント会社に勤務して、正社員にまでなったんですよ。そして週末は洋服のお店でアルバイトをして、さらに芸能というかモデルの仕事も時々しているような時間を過ごしました。

中国留学で身に着けた サバイバル術

—— そして入学した大学生活はいかがでしたか?

学部的にもいろんな国から生徒がきていて、寮に入っていたのですが、人種も性別も混ざった300人くらいが暮らしていたので、“ごちゃごちゃしていた”印象です。ランドリールームで洗濯をして、共同のキッチンで自炊して…ロンドンの大学生活は、金欠でけっこう大変でした。

でも2年目に入って北京に留学してからは、モデルの仕事で貯めたお金で、1階にジムがあつてセキュリティもばっちりの高層マンションに住んでいました。物価が安かったです。





——北京留学中の印象深い思い出は?

学校が提携していた北京師範大学に行ったのですが、家が大学から少し離れていたので、まさかのタクシー通学をしていました。地元の方がタクシーの助手席に乗って運転手さんと話していくのを見て、それをやつたらおもしろいんじゃないかなと思って。それで、運転手さんとの会話から中国語を学んでいました。気に入ってくれてタバコを勧められて、断れないで一緒に吸ったりもしました。(笑)

中国のみなさんは自分の想いをすごく強調する方たちだったので、僕の性格もちょっとせっかちになったような感じがありましたね。向こうのペースに巻き込まれてこちらの予定や段取りが乱されないよう、自分の言い分を早く言うようになりました。何でも確認しないと物事は始まらなかっただし。イギリスでもそうでしたが、中国ではそれ以上に自分からアクションを起こさないと痛い目に遭うことがあって。はっきり言わないとタクシーで遠回りされてしまったり、街中で何かを買ってくれと売り込まれて、きちんと断れなくてその後お金を請求されてしまったり。交渉術もちょっと学んだ

かもしれません。冬はものすごく寒いし、中国留学はけっこうタフでした。中国に限らず、留学はサバイバルインスティンクス(生き延びるための感覚)を得られる経験ではないかと思います。

——留学は1年の予定だったのですか?

はい。1年のカリキュラムを修了して、当時は中国語である程度専門的な話ができるくらいになりました。今でも、中国に行けば問題なく会話できますが、たぶん5・6歳の子どもが話す中国語みたいな感じなのではないかな。

留学期間中にも、どうしてもモデルを続けたくて、仕事のためにちょくちょく帰国していました。留学を終えて目的だった中国語を習得できたときに、あと2年大学に通うより、早く社会に出たいという気持ちのほうが強くなりました。それで大学を休学して日本の芸能界の仕事に本腰を入れ、仕事が軌道に乗ったときに正式に退学しました。

そのために、わかりやすく言えば、輝かしい世界で仕事をしてみたいと思ったのがひとつのきっかけです。自分に何ができるのかマーケットを模索しつつ、最終的に話す仕事へのステップになるかもしれないという想いもありました。

でも、ビジュアルの面で自分が抜きんでていないことはすぐ自覚して、僕の強みは何なのか自問自答を繰り返しました。そして、笑顔や動きを求められる広告の仕事は決まりやすいことがわかつてきました。といっても、受かったオーディションは10%程度だったと思いますが。それでも、0%の人もいたわけですから、良い試練でした。折れずに続けられたのは、負けたくない闘争心と、比較的高齢の両親を支えたいという気持ちだったと思います。

休学して日本に帰ってきてからも、たくさんオーディションを受けては落ちていました。「これに落ちたら大学に戻ろう」という覚悟で受けたスペースシャワーTV(CS放送)の音楽番組のMCに受かって、今につながっています。それから10年近くかかって、毎日忙しくお仕事をさせてもらえるようになりました。子どもの頃から憧れていた「言葉で伝える仕事」という夢を、今、ようやく生き始めているような状況でしょうか。

留学でつかんだ 自分だけの持ち味

——ギャップイヤーの期間にモデルのお仕事を始めたというお話をですが、きっかけは何だったのでしょうか?

18歳のとき、父の知り合いのつてでモデル事務所に入りました。ファッションも好きでしたし、最初はミーハー感覚ですね。僕の夢は、14歳くらいの頃から、BBCのレポーターになることをした。何かを伝える仕事がしたかった。

——お仕事に留学が生きていると思うことはどんなことですか?

今、日本でイギリスと日本についてちゃんと語れる人は限られていると思うんです。両国で長く生活をして2つのアイデンティティをしっかり持ち、いろんな人の言葉を代弁できる数少ない存在なのかなと思っています。だから、英国ロイ

レギュラーパン

■CX「ノンストップ!」月曜～木曜担当／2012年4月～現在出演中 ■J-WAVE「POP OF THE WORLD」毎週土／2016年4月～現在出演中 ■NHK「どーも、NHK」毎週日曜、月1レギュラー／2016年4月～現在出演中 ■Eテレ「おもてなしの基礎英語」月曜～木曜／2018年4月～現在出演中 ■BS日テレ「木曜のシネマ★イブ」毎週木曜／2018年4月～現在出演中 ■NHK WORLD TV「TOKYO FASHION EXPRESS」毎週月曜／2018年4月～現在出演中 ■DAZN「J-ZONE」2017年10月から不定期出演 ■Rakuten TV「週刊NBA」2018年10月から毎週金曜配信 ■CX「バイキング」金曜／不定期出演



ヤルファミリーの話題やEU離脱のトピックなどについては話したくなりますし、そういうお仕事をいただいたりします。

僕からイギリスと中国の留学を取つたら、空っぽになってしまいます。自分は歌手でも役者でもありません。歌や演技などの才覚をもつて、海外の経験で培ったネットワークを通じていろんな情報を得て、それを発信するお仕事をさせていただいている。留学の経験があってこそ今のお仕事があるわけですから、留学って、自分に向けての素晴らしい投資だと思います。

ダイバーシティの時代こそ 留学の経験が輝く

——いろいろな仕事の中に、「おもてなしの基礎英語」(NHK)のMCがありますが、英語を教える際にハリーさんが意識することは何でしょうか。

番組では、出てきたキーフレーズがより使いやすい日常の場面を考えたり、一歩踏み込んだ説明を入れるように意識したりしています。語学学習では、伝わる喜びがないとやる気が出ないと

思うんです。極端に言えば、文法はどうでもいいと思います。とにかく伝わるかどうかだけを気にしてほしいです。そうすると、語彙力が増えていきますから。本当に初步の初步であれば、知っている単語を並べるだけでいいんですよ。

僕が今、留学するなら、まったく話せない言葉を使う国がいいかなと思います。行ったことのない国はまだまだたくさんあるので、行ってみたいですね。南米のブラジル、アルゼンチン、コロンビア、メキシコ、グアテマラ、ニカラグア…いろんな国がぱつぱつ出てきます。今まで出会った友達がいろんな国から来ていたので、実際に見てみて、その国で生きるにはどんなスキルが必要なのか、何を目的として生きるべきなのか、自分はどのくらい生き延びることができそうか、自分の目で見てみたいですね。日本との違いを知れば、日本に住んでいてどれだけ恵まれているのかを感じることもできると思います。

——他の国の方たちとの交流がたくさんあるハリーさんですが、その中で感じることはありますか。

2020年、いよいよ東京でオリンピック、パラリンピックが開催されますが、

人種や性別の壁を超えて「ダイバーシティ（多様性）」というキーワードを理解していないと、社会で役割を果たせないような時代に突入していると思うんです。日本国内でコンビニに行っても、北欧、インド系、アフリカ系、中国系などいろんな国の方が働いていて、日常的に国際文化に触れるようになってきました。さまざまな歴史や文化について理解を深め、異文化に触れたときにどう対応できるかを身に着けておかなくてはならないと思います。

僕は新しい関係にどんどん飛び込むタイプなので、異文化に対して興味を持って常にアンテナを立てているんですが、そのほうが人生がずっとおもしろくなると思うんです。他の国で暮らしてみると、その国の発見もあれば、自分がどういう人なのかも客観的に見えてきます。国際交流の基礎を築いて、これから時代を生きていく力を得るために、留学は一生の宝になるのではないかでしょうか。

MESSEG

留学は、僕にとって白黒の日々がカラーになるような経験でした。これは例えるなら、ケーキを食べるときに、ショートケーキしか知らない僕が、エクレアやモンブランも知ったということです。いろいろ知っているほうが楽しいですよね。それに、人間としての魅力も増すと思います。

留学には人を変える力があります。イギリスと中国の留学が、僕に新しい自分と出会うきっかけをくれました。留学することによって、あなたも、自分の心の奥に秘めている何かを見つけることができると思います！

